

小学生がもつ言語話者に対する期待—国際学校での調査—

久津木 文[†]・田中 佑美[‡]

神戸松蔭女子学院大学 人間科学部[†]・広島経済大学[‡]

ayakutsuki[at]shoin.ac.jp

What do school-aged children at an international school expect from language people speak?

KUTSUKI Aya[†]・TANAKA Yumi[‡]

Kobe Shoin Women's University Faculty of Human Sciences[†]

Hiroshima University of Economics[‡]

Abstract

国際学校の全学年子どもを対象に他者の言語的能力から期待する知識や特徴(親切さ)が学年, 本人の得意言語, 及び海外滞在経験によって異なるかの検討を試みた。全般的に, 言語話者の言語から言語と無関係な能力を期待する傾向と学年, 得意言語, さらに海外滞在経験との関係はみられなかった。しかし, 学年と期待する言語能力との関係には違いがみられた。具体的には, 下の学年に比べ高学年のほうが言語話者に対してより現実的な言語知識を期待する傾向があることが判明した。小学生には, 幼児期にみられるような言語話者に対するバイアスによる過剰な期待は存在しないが, 言語習得経験による期待形成がみられることが示唆された。

This study examined kinds of expectations held by elementary school children of all grades at an international school, towards language speakers based on what language they speak. More specifically, it examined if there were differences in expectations of their abilities and characteristics (kindness) based on the language they spoke, and if the children's grades, language abilities and experience abroad affected the expectations. In general, there was no relationship found among them except for a comparison between the grades and the linguistic expectation tasks. Compared to lower and middle graders, the upper graders expected less from the specific language speakers for their linguistic knowledge, demonstrating the formation of less biased expectation based on the language people speak. The results suggest that unlike in preschoolers there is no cognitive bias towards the mother

tongue speakers in school aged children that would lead them to expect excessively and that the experiences of learning foreign language(s) influences older children's expectation formation of language speakers.

キーワード: 小学生、期待、選択的、言語、外国語

Key Words: elementary school children, expectation, selective, language, foreign language

1. 問題

子どもは早期から自分と同じ母語を話す対象に対して興味の偏りを示すことが近年、認知発達心理学の領域では明らかにされてきている。例えば、生後直後から母親の声 (DeCasper & Fifer, 1980) や母語を好むこと (Mehler, Jusczyk, Lambertz, Halsted, Bertoncini, & Amiel-Tison, 1988; Moon, Cooper, & Fifer, 1993) が知られている。乳児期の間、母語話者への興味は継続し、6 か月児でも外国語話者よりも母語話者を注視する傾向があること (Kinzler, Dupoux, & Spelke, 2007) がわかっている。ただ見るだけではなく、母語を話す人が行うことをよく観察し、同じようなものを好む傾向があることも知られている。例えば、生後7ヶ月ごろには母語話者がくれるおもちゃを選ぶ傾向があること (Kinzler et al, 2007) がわかっており、1歳頃には母語話者が食べているものを食べたがること (Shutts, Kinzler, McKee, & Spelke, 2009) も明らかになっている。さらに幼児期に入ると、自分と同じ言語を話す人物を過剰に良く評価しはじめる。例えば、自分と同じ言語を話す人物がその言語以外の側面でも優れていると評価してしまうような現象がみられるようになる。具体的には、母語話者の他の側面も良いと過大解釈する傾向が4,5歳であり (Brosseau-Liard & Birch, 2010)、客観的知識 (例: 鳥は飛ぶ) の優劣や向社会性の傾向 (例: 困っている人を助ける) でみられることがわかっている。逆に、母語話者以外に対しては、言語以外の側面でも信頼できないと評価する傾向がみられる。具体的には、外国なまりの話者を言語以外の側面でも信用しない傾向が4,5歳でみられ (Kinzler, Corriveau, & Harris, 2010)、なまりのない話者は言語と関係のない事物の知識ももつと解釈することがわかっている。

現在は変わりつつ部分もあるものの、人間の歴史のなかで言語と文化とは密接に関連していた。同じ言語を話す人物の行為等に注目していれば、自分が属する文化についても学ぶことができるのである。つまり、「言語」は学ぶべき情報源を区別する際の指標として機能しているのである。とくにこの指標の機能は子どもが幼い時期にバイアスとして強く働き、さまざまな学習を促進しているのだと考えられている。

しかし、このようなバイアスは恒久的なものではなく、多様な人との接触経験や認知神経的な発達によって弱まっていくのだと考えられる。母語話者に向けられる過剰な興味や信頼は、外国語話者との接触や、子ども自身の得意言語や海外滞在経験等が、外国語話者のみならず日本語話者に対する評価や期待に影響すると考えられる。

よって、本研究では、外国語や外国滞在の経験がある子どもの多い国際学校の児童を対象に、英語話者と日本語話者について期待する知識が学年によって異なるのか、さらに、それが子どもの得意言語や海外経験によって影響をうけるかについて検討する。

本研究の仮説は以下のようなものである。

1. 学年があがるにつれ、他者の言語的能力から期待するものに変化がある。
2. 子どもの得意言語(仮説 2.1) や海外滞在経験(仮説 2.2) により他者の言語的能力から期待するものが異なる。

2. 方法

関東の国際小学校 M の校長及びスクールリエゾンオフィサーから了承を得たうえで、保護者に調査目的及び倫理的配慮についての説明を記載した手紙を配布し、保護者から研究参加の同意を得た子どものみが調査に参加した。

参加者：同意書を得られた全学年の子どもを対象に調査を実施した。本分析の対象である 5 つの課題全てに解答したデータは $N = 174$ であったが、母親の母語が日本語でない者や、夫婦間で日本語以外の言語を使用しているものを外すことで、子どもの母語が日本語である者を抽出し、分析を行った(*母語には様々な定義があるが、本論文では便宜的に母親や父親が普段から家庭で使用している言語がそれに近いと判断した)。よって、最終的な分析対象は $N = 85$ (低学年 (low) = 34, 中学年 (middle) = 38, 高学年 (high) = 15) であった。

調査課題：質問紙を用いてクラス毎に集団法で実施した。質問内容は英語・日本語両言語で書かれており、日本語にはルビを振った。質問紙の冒頭のページには、英語話者の女の子と日本語話者の女の子がおり母語しかわからないことが説明されていた。二人の女の子の好みや知識について尋ねる次の五つの質問が記載されており(下記あ～お)、いずれの質問においても四つの選択肢(①ハナコ(日本語話者)、②メアリー(英語話者)、③二人とも、④わからない)のなかから一つを選んで丸をつけてもらうかたちで回答を求めた。

- あ) テレビが好きなのはだれか(好み—統制)
- い) 英単語の意味を聞く相手(英語知識)
- う) 日本語の単語の意味を聞く相手(日本語知識)
- え) 新奇事物の使い方を聞く相手(事物の知識)
- お) 迷子の子どもを助けるのに尋ねる相手(親切さ)

子ども自身が各言語に対して自信があるかについて尋ねる項目を質問紙に設けた。さらに、海外経験については、親に配布した質問紙で海外滞在期間を尋ねた。

3. 結果と考察

3.1. 学年比較

$N=174$ を対象(内訳 低学年 (low) = 71, 中学年 (middle) = 66, 高学年 (high) = 37) とし、 3×2 分析にかけられるよう整理しなおした。学年 (3) \times 選択性の有無(どちらかの話者 vs. その他) (2) または、言語系課題(い) 及びう)) の場合対応する言語話者を選択したか

vs. それ以外の選択であったかで分類をしたうえで分析にかけた。下記表1～表5が、課題毎の結果である。

表 1: 好み課題における選択の学年比較

	Other	どちらかを選ぶ
low	30	4
middle	33	3
high	14	1

表 2: 英語知識課題における選択の学年比較

	Mary 以外	Mary
low	1	33
middle	3	33
high	5	10

表 3: 日本語知識課題における選択の学年比較

	ハナコ以外	ハナコ
low	1	33
middle	2	34
high	5	10

表 4: 事物の知識課題における選択の学年比較

	Other	どちらかを選ぶ
low	32	2
middle	33	3
high	15	0

表 5: 親切さ課題における選択の学年比較

	Other	どちらかを選ぶ
low	33	1
middle	36	0
high	15	0

課題毎に Fisher の正確検定を用いて学年と選択傾向の関連を検討し、下位検定には Ryan 法を用いた。学年内での選択傾向の比較には正確二項検定を用いた。結果は下記の通りである。

あ) 「好み課題」： 誰が何を好むのかは登場人物の話者から正確に推測できるものではない、よって、この課題は二人の言語話者間でそもそも選択性に差がないことを確認するための統制課題の役割を果たした。ここでは話者のどちらかを選ぶ傾向とそれ以外の「わからない」、「二人とも」の選択肢を選ぶ傾向を比較した。3つの学年において、どちらかを選ぶ傾向は低く、その他の選択肢を選ぶ傾向が高いこと(全て $p < .01$)が示された、さらに、各言語話者とその他の3つで分けた場合でも選択性に有意な差はみられなかった ($p < .01$)。学年と選択傾向の関連性については、有意な傾向がみられず (n.s.)、学年によってメアリーかハナコを選ぶのか、その他の反応を返すのかに関連はみられなかった。このことにより、 学年によって特定の言語話者を選ぶ傾向が変わらないことを確認した。

い) 「英語知識課題」： 英単語の意味を聞くのに適した相手を選ぶ課題であり、話者の言語から期待されるものと繋がりが強いものである。よって、ここでは、英語話者であるメアリーを選択した人数とそれ以外の選択肢を選んだ人数を比較した。

学年と選択傾向の関連性について検討したところ、有意な関連性がみとめられた ($p < .05$)。低学年と高学年で下位検定を行った結果、低学年のほうが高学年よりもメアリーを選びやすい傾向があった。さらに各学年で選択傾向を比較したところ、高学年でのみ有意な差がみられなかった。以上のようなことから、英語話者ならば英単語の意味を知っていると期待する傾向は、低学年から中学年の間に顕著であり、高学年で弱まることが示唆された。

う)「日本語知識課題」： い)と同様に、この課題は日本語の単語の意味を聞く相手を選ぶ課題であった。よって、ここでは日本語話者であるハナコを選んだ人数とそれ以外を選んだ人数の比較を行った。学年と選択傾向との関連性を検討した結果、有意な関連性が認められた ($p < .01$)。

下位検定の結果、低学年のほうが高学年よりもハナコを選ぶ傾向が高いことがわかった。さらに、各学年での選択傾向の比較の結果、低学年及び中学年では有意にハナコを選択していた (いずれも $p < .01$) が、高学年では有意差がないことがわかった。このことから、日本語の単語は日本語話者が知っているはずだと期待する傾向は低学年から中学年までみられるが、高学年になるとそのような期待は弱まることが示唆された。

え)「新奇事物課題」： この課題では、見たことのない事物 (道具) をどのように使うのかを聞く相手を選ぶ課題であった。道具の使い方は話者の言語とは関係しないという見方もあるが、言語と文化そして道具使用は関連性の高いものと考えられる傾向があることも先行研究では報告されている。ここでは、話者のどちらかを選んだ人数とそれ以外の選択肢を選んだ人数を比較した。

学年と選択傾向との関連性を検討した結果、有意な関連性は認められなかった (n.s.)。学年内での選択傾向の比較では、どの学年でもどちらかを選ぶ傾向はその他の選択肢よりも低いことが判明した (全て $p < .01$)。これらのことから、話者の言語から、どちらかの言語話者のほうが事物についての知識があると期待する子どもの数には学年差がなく、さらに、そのように関連付けている子どもは少ないことが示唆された。

お)「親切さ課題」： この課題では、困ったときに助けてくれそうな親切な人物は誰であるかを選ぶ課題であった。親切であるという人の性質や特徴は話す言語とは関連のないものであるはずである。

この課題の分析では、話者のどちらかを選んだ人数とそれ以外の選択肢を選んだ人数を比較した。学年と選択傾向の関連性を検討した結果、有意な関係性は認められなかった (n.s.)。学年内での選択傾向の比較でも、いずれの学年でも、話者を選ばず、どちらも選ばない傾向が高いことがわかった (全て $p < .01$)。以上のようなことから、どちらかの言語話者のほうがより親切であると期待する傾向はどの学年でもみられないことがわかり、話者の言語と親切さを関連付けて考える子どもは少ないことが示唆された。

3.2. 得意な言語による比較

多言語に接しながら育つ子どもの「母語」は変動的なものであり、その定義も多様である。一般的には獲得時期、つまりは、生後直後から接触した言語を母語と呼ぶ場合が多いが、多様な言語環境で育つ子どもの場合、この基準のみでは十分ではないことが多い。

Skutnabb-Kangas (1989) は「母語」の基準として次の4つを設けている(訳は高橋(2013)より)。①接触時期：人が最初に学んだ言語、②運用能力：人が最も良く知っている言語、③機能：人が最もよく使用する言語、④アイデンティティ：(内的)人が自分のものだと認識する言語、(外的)他者によってその言語のネイティブスピーカーだと認識される言語。

このように、話者自身が自信をもって使え、アイデンティティを感じているものが、「母語」であるともいえるのである。

本研究では、母親の母語そして父親(母と話す言語から推測)の言語が日本語である子どものみを抽出することで、獲得順位の観点からみた「母語」が日本語である可能性が高い子どもを対象としているが、ここではさらに、子どもが得意であると思っている言語が何かを調べ、これと各言語話者から期待するものが子ども自身の得意言語と関連するかを検討した。得意な言語についての回答がなかった子どもが2名いたため、この分析ではN=83が対象となった(英語のみが得意(English Only)=28, 日本語のみが得意(Japanese Only)=33, 両言語が得意(Both)=22)

言語群(3) x 選択性の有無(どちらかの話者 vs. その他) or 言語系課題の場合対応する言語話者を選択したか vs. それ以外の選択かで検討を行った。下記表6~表10が、課題毎の結果である。

表 6: 好み課題における選択と得意な言語

	Other	どちらかを選ぶ
English only	25	3
Japanese only	30	3
Both	21	1

表 7: 英語知識課題における選択と得意な言語

	Mary 以外	Mary
English only	3	25
Japanese only	5	28
Both	1	21

表 8: 日本語知識課題における選択と得意な言語

	ハナコ以外	ハナコ
English only	3	25
Japanese only	5	28
Both	0	22

表 9: 事物の知識課題における選択と得意な言語

	Other	どちらかを選ぶ
English only	26	2
Japanese only	31	2
Both	21	1

表 10: 親切さ課題における選択と得意な言語

	Other	どちらかを選ぶ
English only	28	0
Japanese only	32	1
Both	22	0

課題毎に Fisher の正確検定を用いて言語群（得意言語群）と選択傾向の関連を検討し、下位検定には Ryan 法を用いた。言語群内での選択傾向の比較には正確二項検定を用いた。結果は下記の通りである。

あ)「好み課題」：ここでは話者のどちらかを選ぶ傾向とそれ以外の「わからない」、「二人とも」の選択肢を選ぶ傾向を比較した。3つの言語群において、どちらかを選ぶ傾向は低く、その他の選択肢を選ぶ傾向が高いこと(全て $p < .01$)が示された。さらに各言語話者とその他の3つで分けた場合でも選択性に有意な差はみられなかった(n.s.)。言語群と選択傾向の関連性の検討では、有意な傾向がみられず(n.s.)、言語群によってメアリーかハナコを選ぶのか、その他の反応を返すのかに関連はみられなかった。このことより、得意な言語によって特定の言語話者を選ぶ傾向に違いがないことを確認した。

い)「英語知識課題」：ここでは、英語話者であるメアリーを選択した人数とそれ以外の選択肢を選んだ人数を比較した。

言語群と選択傾向の関連性について検討したところ、有意な関連性は認められなかった(n.s.)。言語群内での比較の結果、メアリーを選択した人数がメアリー以外を選択した人数よりも有意に多いことがわかった(全て $p < .01$)。このことから、まずこの時期の子どもは英語話者には英単語の知識があるという期待があること、そして、その傾向は子ども自身の得意な言語とは関連がないことが示された。

う)「日本語知識課題」：ここでは日本語話者であるハナコを選んだ人数とそれ以外を選んだ人数の比較を行った。言語群と選択傾向との関連性を検討した結果、有意な関連性は認められなかった($p < .01$)。各言語群内での選択傾向の比較の結果、ハナコを選択した人数がそれ以外を選択した人数よりも有意に高い(全て $p < .01$)ことが示された。このことから、まずこの時期の子どもには日本語の知らない単語は日本語話者が知っているという期待があること、そしてその期待は子ども自身の得意言語とは関連がないことが示された。

え)「新奇事物課題」：ここでは、話者のどちらかを選んだ人数とそれ以外の選択肢を選んだ人数を比較した。言語群と選択傾向との関連性を検討した結果、有意な関連性は認められなかった(n.s.)。

言語群内での選択傾向の比較では、どの言語群でもどちらかを選ぶ傾向はその他の選択肢よりも低いことが判明した(全て $p < .01$)。これらのことから、この時期の子どもは、言語話者の言語と道具の知識は関係ないと理解しており、この傾向は子ども自身の得意言語と関連がないことが示唆された。

お)「親切さ課題」：この課題の分析では、話者のどちらかを選んだ人数とそれ以外の選択肢を選んだ人数を比較した。言語群と選択傾向の関連性を検討した結果、有意な関係性は認められなかった(n.s.)。いずれの言語群でも、特定の話者を選ばず、どちらも選ばない傾向が高いことがわかった(全て $p < .01$)。以上のようなことから、親切さは話者の言語の

種類とは関係がないと理解している子どもが多く、この傾向は子ども自身の得意言語と関連がないことが示唆された。

3.3. 海外滞在期間割合による比較

母親から回収できた質問紙とマッチできた N=95 を対象に、子どもの海外滞在経験と各課題における選択傾向との関連の検討を行った。

海外滞在経験は、海外滞在期間割合（海外での滞在期間（月）/ 調査時の子どもの月齢*100）に換算して分析に用いた（平均= 24.28 ヶ月（SD=27.61））。ここでは、各課題での選択肢（3種）によって海外滞在期間の割合に違いがあるかを一元配置分散分析を用いて検討した。その結果、いずれの課題においても有意な差はなかった。子どもの海外滞在割合と各課題での選択には関連がみられなかった。

4. 総合考察

本研究では、国内の国際学校の全学年を対象に、話者の言語から期待する知識や特徴が学年、本人の得意言語、及び海外滞在経験によって異なるかの検討を試みた。

その結果、学年間で話者の話す言語から期待するものに違いがみられたが、その領域は限られていた。違いがみられたのは言語の知識に関する領域であったのに対し、その他の事物の知識や親切さに関する領域では違いがみられなかった。モノリンガルの幼児を対象にした研究等では外国語話者に対して言語以外の事物の知識や道徳性についてもあまり信頼しない傾向が報告されているが、本研究の対象が小学生であったこと、そして早期から外国語や異文化と接触していることによりそのような選択性はみられなかったのだと考えられる。他方で、二つの言語課題においては高学年が他学年と比較して呈示された言語の話者をより選ばない傾向をみせることから、高学年になると言語を話すこととその知識についての関連をより現実的に捉えることができるようになることが示唆される。

本人たちの得意言語と各課題の選択傾向には関連がみられなかった。さらに、海外滞在期間の割合との関連もみられなかったことから、幼児期にみられる母語や慣れ親しんだ言語話者への評価や興味の偏りは、多言語・多文化接触のある小学生の子どもにはすでに存在しないものなのかもしれない。事物の知識や道徳性など言語以外の能力をも過大・過小評価するといった傾向はどちらかというと幼少期にみられる認知的なバイアスによるもので、子どもの知識や経験によるものではないと考えられる。これに対して、高学年でみられた言語話者のもつ言語知識に対する期待の違いは、子ども自身の言語習得の経験が影響したのだと考えられる。もちろん、今回の分析における「母語」の推定方法が正確であったかどうかの問題も残る。

本研究ではそれぞれの要因を個別に検討したが総合的・複合的な分析がさらに必要である。通常の日本の小学校に通う子どものデータとの比較ができればより詳細に影響を捉えることができるだろう。

参考文献

- Brosseau - Liard, P. E, & Birch, S. A. (2010). 'I bet you know more and are nicer too!': what children infer from others' accuracy. *Developmental Science*, 13(5), 772-778.
- DeCasper, A. J, & Fifer, W. P. (1980). Of human bonding: Newborns prefer their mothers' voices. *Science*, 208, 1174 – 1176.
- Kinzler, K. D, Corriveau, K. H, & Harris, P. L. (2011). Children's selective trust in native - accented speakers. *Developmental Science*, 14(1), 106-111.
- Kinzler, K. D, Dupoux, E, & Spelke, E. S. (2007). The native language of social cognition. *Proceedings of the National Academy of Sciences of the United States of America*, 104, 12577 – 12580.
- Mehler, J, Jusczyk, P, Lambertz, G, Halsted, N, Bertoncini, J, & Amiel-Tison, C. (1988). A precursor of language acquisition in young infants. *Cognition*, 2, 143 – 178.
- Moon, C, Cooper, R. P, & Fifer, W. P. (1993). Two-day-olds prefer their native language. *Infant Behavior and Development*, 16, 495 – 500.
- Shutts, K, Kinzler, K. D, McKee, C. B, & Spelke, E. S. (2009). Social information guides infants' selection of foods. *Journal of Cognition and Development*, 10, 1 – 17.
- Skutnabb-Kangas, T. (1989). *Bilingualism or not: The education of minorities (Vol. 7)*. Multilingual matters.
- 高橋朋子 (2013) . 移民の母語教育. 多言語化現象研究会 (編) 多文化社会日本. 東京: 三元社.

Author's web site:<http://www.shoin.ac.jp/>

(受付日: 2018 年 1 月 10 日)